

第2回特発性心室細動研究会 (J-IVFS) 事務局報告 2

第1回特発性心室細動研究会特発性心室細動 (IVF) ミニシンポジウムに関する報告

相原直彦*¹ 高木雅彦*² 横山泰廣*³ 青沼和隆*⁴ 平岡昌和*⁵

*¹国立循環器病センター内科心臓部門

*²大阪市立大学大学院医学科循環器病態内科学

*³横須賀共済病院循環器センター内科

*⁴横須賀共済病院循環器センター内科 (現 筑波大学循環器内科学)

*⁵東京医科歯科大学難治疾患研究所 (現 厚生労働省労働保険審査会)

本報告では、平成15年度2月14日に大手町サンケイプラザで開かれた第1回特発性心室細動研究会での発表内容をまとめた。前半はBrugada症候群の診断やリスク評価などに関する報告が、後半はBrugada型心電図波形を示さない特発性心室細動 (IVF) に関しての報告が行われた。とくに後半の非Brugada型IVFに関する発表では、非Brugada型IVFがいくつかのグループに分類される可能性が示唆された。

日本全国から計8施設、20例の非Brugada型IVFが報告された。慶應義塾大学からは、(1)右室流出路起源心室性期外収縮から心室細動になった5例が報告され、心室細動の発生が迷走神経緊張状態と関連していることが示唆された。(2)カテコールアミンに関連した多形性心室頻拍から心室細動に移行した5例(長崎大学から2例、都立広尾病院から2例、日本大学から1例)が報告された。このうち、長崎大学の2例は驚愕時での発症や短い連結期の多形性心

室頻拍を特徴としていた。都立広尾病院の2例は、カテコールアミンによりbidirectional tachycardiaが出現していた。(3)QRS終末部のノッチやOsborn波を特徴とするIVFが計4例(岩手医科大学から2例、日本大学から1例、鳥取大学から1例)が報告された。(4)横浜労災病院からは、プルキンエ繊維に関連した多形性心室頻拍からIVFに移行する2症例が報告された。最後には(5)男性に多いという特徴しか特徴の認められないIVF4例が山口大学から報告されている。このように、少ない症例数ながら、それぞれ特徴をもった症例であったのが印象的であった。

最後に、本報告では、上記のような分類を行ったが、今後このような非Brugada型IVFをさらに報告していただくことにより、特徴のある分類方法が発見される可能性があるのではないかと思われた。

文 献：心電図，2003；23：Suppl4